様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｈ０２６３９

研究課題名（和文）思春期における自尊心の低下と内在的・外在的問題との関係

研究課題名（英文）The relationship between the decline of self-esteem and internalized / externalized problems in puberty

研究代表者
加藤　弘通（Kato, Hiromichi）

北海道大学・教育学研究院・准教授

研究者番号：２０３９９２３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　10,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では思春期のおける自尊心の低下と問題行動との関連を検討するために、思春期における自尊心の変化、及びその低下の要因、思春期における自尊心の低下と問題行動の関連性をタイミングと質という視点から検討した。それによって、思春期の問題行動を抑止するために、どのような児童生徒にいつ、どのような介入が必要かを検討することが目的である。
　その結果、（1）思春期の自尊心の変化については多様な変化パターンが存在していること、（2）友人関係、親子関係が強く関連していること、（3）中学校入学後の自尊心の低下、及び顕在的自尊心と潜在的自尊心のズレが、抑うつを高める方向で働く可能性が高いことが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、以下の3点にある。1つは、思春期の自尊心の低下が問題視されてきたが、そこには多様な変化パターンが存在しており、一概に低下するだけとは限らないということを明らかにしたことである。2つめは、どのような要因が自尊心の低下と関連しているのかを明らかにした点である。特に友人関係と親子関係の重要性を明らかにできたことは、実践への示唆としても意義があると考える。そして、最後に、どの時期・どのような自尊心の低下が問題行動と結びつきやすいのかを明らかにしたことである。以上を通して、いつ・どのような自尊心の低下にリスクがあり、どのような要因に働きかける必要があるのかを明らかにした点に意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine the relationship between low self-esteem and problem behaviors during adolescence. The specific objectives were: to identify changes in self-esteem during adolescence, to identify factors contributing to low self-esteem during adolescence, and to examine the relationship between low self-esteem and problem behaviors during adolescence, considering timing and quality. By identifying these aspects, we aimed to determine which students require specific interventions, when, and how to prevent problematic behaviors.
The results revealed the following: First, there are many patterns of change in self-esteem during adolescence. Second, friendships and children-parent relationships strongly influence self-esteem. Third, whiles varied by cohort, a decrease in self-esteem after entering junior high school and a discrepancy between explicit and implicit self-esteem contributed to an increased likelihood of depression.

研究分野：発達心理学

キーワード：自尊心　自尊感情　思春期　問題行動　抑うつ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## １．研究開始当初の背景

これまで多くの研究が，子どもの自尊心と問題行動との関連性を指摘し(Trzesniewski，et al.，　2006; 大江・亀田, 2015)，特に日本の子どもは諸外国と比べ自尊心が低いことが問題視されてきた (古荘,2009; 佐藤, 2009)。しかしその一方で，発達的には思春期に自尊心が低下することが知ら れており(Robins & Trzesniewski，2005; Twenge & Campbell，2001; 都筑, 2005)，自尊心の低下それ自体が必ずしも問題行動と結びつくとは限らない。

こうした問題から，自尊心の高低のみに注目し，調査および介入を行おうとする研究，教育実 践に対しては厳しい批判もなされている(Baumeister, et al., 2003; 中間, 2016)。特に近年の研究で は，単に 1 時点の自尊心の高低ではなく，安定性といった自尊心の変化パターンやその低下がどのような要因に基づいているのかといった自尊心の質をより詳細に検討する必要性が指摘されている(Kernis, et al., 1998; 中間・小塩, 2007; 中間, 2016)。

## ２．研究の目的

本研究の目的は思春期のおける自尊心と問題行動との関連を検討するために、以下、3 つ課題を明らかにすることであった。（1）思春期における自尊心の変化を明らかにすること、（2）思春期における自尊心の低下の要因を明らかにすること、そして（3）思春期における自尊心の低下と問題行動の関連性とそのタイミングと質（顕在的自尊心と顕在的自尊心）によって検討した。以上のことを明らかにすることを通して、問題行動を抑止するために、どのような生徒にいつ、どのような介入が必要かを検討した。

## ３．研究の方法

### （1）調査対象

2 つの中学校区を対象に、計 2,146 名（男子 1,019 名、女子 1,127 名）に対して、2014～2019 年までの 6 年間の縦断調査を行った。なおうち 1 学校区は小中一貫校で、2016 年度より 1 中学校に 3 つの小学校が合流する非一貫校の学校区が調査対象として加わった。

### （2）調査内容と手続き

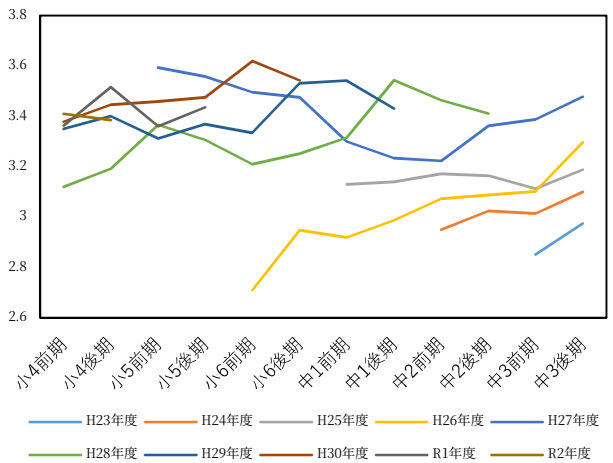
以下の内容を含む質問紙を年度内に 2 回（7 月と 2 月）、6 年間、計 12 回行った。①（顕在的）自尊心（山本・松井・山成,1982）、②抑うつ DSRS-C（並川・谷・脇田,2011)、③批判的思考態度（平山・楠見，2004）、④教師との関係（大久保・青柳，2004）、⑤友人関係（榎本，1999）、⑥学校享受感(古市・玉木，1994)、なお 2 月の調査においては、ネームレター課題（Nuttin，1985）で測定される潜在的自尊心を測定した。

## ４．研究成果

### （1）思春期における自尊心の変化

Figure 1 は各コホート自尊心の変化を示したものである、これまでの自尊心に関する大規模な研究では、思春期は自尊心が低下するということが言われてきた（e.g.，Robins & Trzesniewski，2005）。しかし、本家研究の結果からは、かなりコホートによって異なる変化を示すことが分かった。その理由としては、以下の 2 つが考えられる。

Figure 1 自尊心の推移




１つは、先行研究の多くが、1 時点の調査である横断研究の結果をもとにしているのに対し、本研究の結果が縦断研究にもとづくものであるからである。

2つは、思春期における自尊心の変化の仕方には、文化差があり、日本と諸外国では、自尊心に関して、異なる変化パターンを描く可能性があるということである。

また別の視点で考えると、コホートによって自尊心の変化の仕方に大きな差があるということは、児童生徒が置かれた環境によって、自尊心のあり方は大きな影響を受けるということを示唆していると考えられる。

(2)思春期における自尊心の低下の要因

続いて、思春期における自尊心の低下要因を検討するために、小5～中3までのデータがそろっているH27（2003年度）入学コホートを対象に、自尊心と諸要因との関連を検討した。このコホートにおいては、中2前期がもっとも自尊心が低下する時期であったことから、この時期の自尊心にもっとも強く関連する要因を対人関係の視点から探索的に検討した。具体的には、友人関係（友人への信頼）と教師との関係、親子関係と中2前期の自尊心の関連性を検討した。

Table 1　自尊心と対人関係の相関

| | | *r* | N |
|---|---|---|---|
| 友人関係 | 小5前期 | | 32 |
| | 小5後期 | | 32 |
| | 小6前期 | .399** | 58 |
| | 小6後期 | .393** | 60 |
| | 中1前期 | .430** | 243 |
| | 中2前期 | .479** | 250 |
| 教師との関係 | 小5前期 | | 32 |
| | 小5後期 | | 32 |
| | 小6前期 | | 58 |
| | 小6後期 | | 60 |
| | 中1前期 | .248** | 241 |
| | 中1後期 | .213** | 240 |
| | 中2前期 | .211** | 250 |
| 親子関係 | 小5前期 | | 32 |
| | 小5後期 | | 32 |
| | 小6前期 | | 58 |
| | 小6後期 | | 60 |
| | 中1前期 | .406** | 239 |
| | 中1後期 | .365** | 238 |
| | 中2前期 | .448** | 250 |

*友人関係については、中1後期のデータがない

**空欄は有意な関連なしを意味する

Table2は、H27コホートの中2前期の自尊心とそれ以前の時点の友人関係、教師との関係、親子関係との相関係数を求めたものである。

中1をはさみ、調査参加者に増減があるが、もっとも関連していたのは友人関係であり、次いで親子関係であった。

特に友人関係は関連が強いだけではなく、小学校における友人への信頼感が、中2の自尊心との関連を示しており、他の要因は、小学校と中学校では関連が見られなかった。つまり、小学校6年次の友人関係のあり方が、中2前半の自尊心の低下に関連している可能性が考えられる。

親子関係については、中学入学後の親子関係が比較的強く関連しており、対して教師との関係も関連はみられたが、他の要因に比べるとその関連性は弱かった。

したがって、思春期における自尊心の低下には、小学校から引き続く友人関係のあり方、中学入学後の親子関係のあり方が、関連していると考えられる。

なお、H27コホートに関しては、中1から、新たな中学校区が調査対象に加わったため、それ以前は、1つの中学校区（小中一貫校）のデータである。そのため、小学校のところで関連が見られた（見られなかった）ものについては、1つの学校区の特徴を強く反映している可能性があり、それは本研究の限界でもある。

（3）思春期における自尊心の低下と問題行動の関連

思春期における自尊心の低下と問題行動との関連性を明らかにするために、以下2つの視点から抑うつとの関連性を検討した。1つは、自尊心の低下時期であり、どの時期の自尊心の低下が抑うつと関連するのかを検討した。2つは、自尊心のタイプであり、どのような自尊心（顕在的自尊心と潜在的自尊心）が抑うつと関連するのかを検討した。

①自尊心の低下時期と抑うつの関係

思春期のどの時期における自尊心の低下が問題行動と関連するのかを検討するために、H27年度とH28年度コホートを対象に、各学年の自尊心の増減と抑うつの関係を検討した。具体的には、各学年の後期の自尊心の得点から前期の自尊心の得点の差分を求め、その差分と抑うつで相関分析を行った（Table2, Table3）。

**その結果、H27 年度コホートでは、中 2 の自尊心の変化と中 2 後期（*r* = -.268, *p* < .01）及び中 3 後期の抑うつ（*r* = -.156, *p* < .05）で有意な負の相関が見られ、中 3 の自尊心の変化と中 3 後期の抑うつと有意な相関がみられた（*r* = -.153, *p* < .05）。つまり、H27 年度コホートにおいては、中 2 と中 3 の自尊心の低下が、その時期及びそれ以降の抑うつを高める可能性があると考えられる。**

Table2　H27 コホートにおける各学年の自尊心の変化と抑うつの関係

| H27 年度コホート | 抑うつ | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 自尊心の変化 | 小 6 前期 | 小 6 後期 | 中 1 前期 | 中 2 前期 | 中 2 後期 | 中 3 前期 | 中 3 後期 |
| 小 5（後期ー前期） | 0.280 | -0.009 | 0.144 | 0.038 | 0.157 | 0.083 | 0.076 |
| N | 17 | 18 | 28 | 28 | 28 | 27 | 26 |
| 小 6（後期ー前期） | .326* | 0.020 | 0.249 | -0.003 | 0.113 | 0.181 | 0.157 |
| N | 59 | 59 | 52 | 54 | 52 | 51 | 50 |
| 中 1（後期ー前期） | -0.137 | -0.019 | .224** | 0.029 | 0.016 | 0.047 | -0.023 |
| N | 49 | 51 | 222 | 218 | 213 | 216 | 214 |
| 中 2（後期ー前期） | 0.074 | .279* | -0.003 | 0.073 | **-.268**** | -0.12 | **-.156*** |
| N | 55 | 57 | 225 | 227 | 230 | 222 | 222 |
| 中 3（後期ー前期） | -0.178 | -0.065 | 0.099 | 0.128 | -0.027 | 0.098 | **-.153*** |
| N | 56 | 58 | 234 | 229 | 233 | 235 | 236 |

*　*p*<.05, ** *p*<.01,　**中 1 後期の抑うつのデータはない**

Table3　H28 コホートにおける各学年の自尊心の変化と抑うつの関係

| H28 年度コホート | 抑うつ | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 自尊心の変化 | 小 5 前期 | 小 5 後期 | 小 6 前期 | 中 1 前期 | 中 1 後期 | 中 2 前期 | 中 2 後期 |
| 小 4（後期ー前期） | -0.223 | -0.111 | -0.125 | -0.163 | **-.324*** | -0.267 | -0.279 |
| N | 41 | 42 | 44 | 41 | 41 | 38 | 34 |
| 小 5（後期ー前期） | 0.086 | **-.363*** | -0.089 | -0.005 | 0.036 | 0.133 | 0.233 |
| N | 40 | 41 | 42 | 38 | 38 | 36 | 31 |
| 小 6（後期ー前期） | 0.095 | 0.101 | .173* | -0.079 | -0.097 | -0.11 | -0.077 |
| N | 43 | 44 | 161 | 144 | 139 | 140 | 134 |
| 中 1（後期ー前期） | -0.192 | 0.116 | 0.045 | 0.08 | **-.216**** | **-.165*** | -0.001 |
| N | 41 | 43 | 146 | 163 | 163 | 155 | 151 |
| 中 2（後期ー前期） | 0.146 | 0.213 | 0.135 | -0.039 | 0.108 | 0.134 | **-.192*** |
| N | 34 | 36 | 143 | 154 | 152 | 157 | 156 |

*　*p*<.05, ** *p*<.01,　**小 6 後期の抑うつのデータはない**

**H28 年度コホートでは、小 5 の自尊心の変化と小 5 後期（*r* = -.363, *p* < .05）で有意な負の相関が見られ、中 1 の自尊心の変化と中 1 後期（*r* = -.216, *p* < .01）及び中 2 前期の抑うつ（*r* = -.165, *p* < .05）、中 2 の自尊心の変化と中 2 後期の抑うつで有意な相関がみられた（*r* = -.192, *p* < .05）。つまり、H28 年度コホートにおいては、小 5 と中 2、中 3 の自尊心の低下が、その時期及びそれ以降の抑うつを高める可能性があると考えられる。**

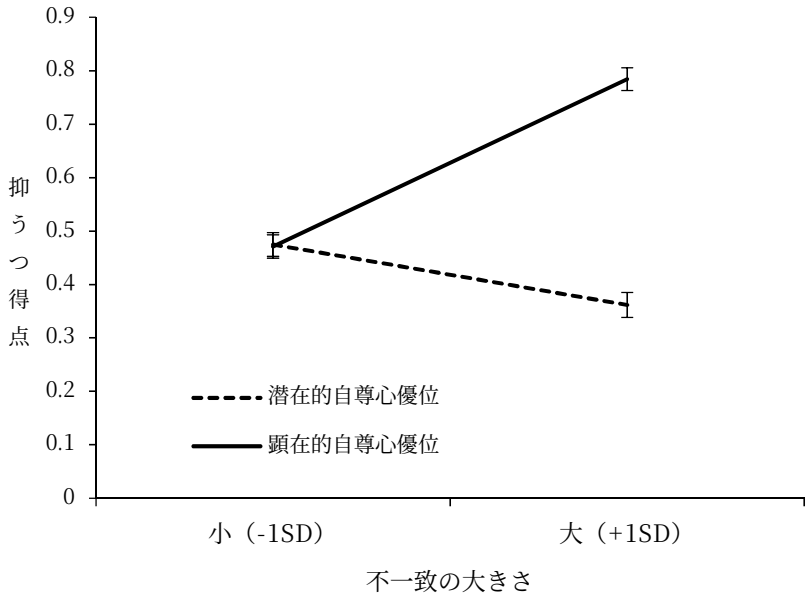
**また抑うつは、内在化問題としてだけでなく、非行の一部に関連することも以前から指摘されておる（小保方・無藤，2005）。したがって、上記の時期に自尊心と抑うつに関連性がみられたことは、これらの時期の自尊心の低下が、児童生徒の問題行動に結びつきやすい可能性があることを示唆していると思われる。**

**②自尊心のタイプと抑うつの関連**

加えて、どのようなタイプの自尊心が抑うつと関連しているのかを検討するために、顕在的な自尊心と潜在的な自尊心を測定し，両者が抑うつに及ぼす影響を検討した。その結果，顕在的自尊心のみならず潜在的自尊心も抑うつを抑制していたが，その影響は顕在的自尊心のほうが強いことが分かった。

そして，個人内で顕在的・潜在的自尊心に不一致がある場合に，より抑うつが高くなることが示された。特に，顕在的自尊心に比して潜在的自尊心が高い場合，両者の不一致が大きくなるほど，抑うつも高いことが分かった（Figure2）。したがって，児童・生徒の精神的健康という観点において，顕在的自尊心のみならず潜在的自尊心も高い状態であることと，両者のバランスが取れている状態が望ましいということが分かった。

Figure 2 自尊心のタイプと抑うつの関連



５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Hou Yuejiang、Ota Masayoshi、Kato Hiromichi | ４．巻<br>68 |
| ２．論文標題<br>A Longitudinal Examination of Changes in Students’ Enjoyment of School and Influences of Teachers and Parents During the Primary-Secondary School Transition: | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>The Japanese Journal of Educational Psychology | ６．最初と最後の頁<br>360～372 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.5926/jjep.68.360 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>加藤弘通 | ４．巻<br>788 |
| ２．論文標題<br>いじめを受けている子のSOSを捉えた先のこと | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>教育と医学 | ６．最初と最後の頁<br>28－34 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Hou Yuejian・太田 正義・加藤 弘通 | ４．巻<br>134 |
| ２．論文標題<br>中学生の学年移行期における学校生活享受感と欠席行動との関連 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>北海道大学大学院教育学研究院研究紀要 | ６．最初と最後の頁<br>1－15 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.14943/b.edu.134.1 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>加藤 弘通 | ４．巻<br>31 |
| ２．論文標題<br>思春期における自尊感情研究の課題 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>青年心理学研究 | ６．最初と最後の頁<br>78～81 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.20688/jsyap.31.1_78 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>侯ゲツ江・太田正義・加藤弘通 | 4．巻<br>134 |
| 2．論文標題<br>中学生の学年意向における学校生活享受感と欠席行動の関連 | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>北海道大学大学院研究紀要 | 6．最初と最後の頁<br>1~15 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>加藤弘通 | 4．巻<br>788 |
| 2．論文標題<br>いじめを受けている子のSOSを捉えた先のこと | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>教育と医学 | 6．最初と最後の頁<br>28-34 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>加藤弘通・太田正義・松下真実子・三井由里 | 4．巻<br>30 |
| 2．論文標題<br>思春期になぜ自尊感情が下がるのか | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>青年心理学研究 | 6．最初と最後の頁<br>25~40 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>弓削洋子 | 4．巻<br>72 |
| 2．論文標題<br>学級の多様性パターンに応じた学級経営の検討 | 5．発行年<br>2023年 |
| 3．雑誌名<br>愛知教育大学研究報告(教育科学編) | 6．最初と最後の頁<br>34-40 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>弓削洋子 | 4．巻<br>71 |
| 2．論文標題<br>小学校教師の指導行動分析研究におけるカテゴリー化の課題－教師－児童の相互作用の様相に注目して | 5．発行年<br>2022年 |
| 3．雑誌名<br>愛知教育大学研究報告(教育科学編) | 6．最初と最後の頁<br>41-49 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>弓削洋子・楞野祥子 | 4．巻<br>41 |
| 2．論文標題<br>学級の遂行資源の高さと教師の指導行動の関連の検討 ： 場面想定法を用いて | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>学校教育学研究論集 | 6．最初と最後の頁<br>15-28 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>弓削洋子 | 4．巻<br>67 |
| 2．論文標題<br>児童の逸脱行動が問題視される学級集団特性の分析 | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>愛知教育大学研究報告 | 6．最初と最後の頁<br>25-31 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計17件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>Hiromichi KATO |
| 2．発表標題<br>Exploring Risk Factors that Make School Bullying More Severe. |
| 3．学会等名<br>TThe 6th ICEDU(International Conference on Education, in BangKong) |
| 4．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Hiromichi Kato, Ota Masayoshi, & Motoki Fujii. |
| ２．発表標題<br>What factors make school bullying more severe? |
| ３．学会等名<br>International School Psychology Association（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>加藤弘通・太田正義・舒悦 |
| ２．発表標題<br>いじめ類型と深刻化の関係 |
| ３．学会等名<br>日本教育心理学会第61回総会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>舒悦・加藤弘通・太田正義 |
| ２．発表標題<br>中学生のいじめ被害分類と対人関係の関連 |
| ３．学会等名<br>日本教育心理学会第61回総会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>稲垣勉・江・太田正義・加藤弘通 |
| ２．発表標題<br>小・中学生における顕在的・潜在的自尊感情と抑うつの関連 |
| ３．学会等名<br>日本グループ・ダイナミックス学会第66回大会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Hiromichi Kato |
| ２．発表標題<br>Exploring Risk Factors that Make School Bullying More Severe. |
| ３．学会等名<br>The 6th ICEDU（国際学会） |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Kato,H & Ota,M. |
| ２．発表標題<br>Why does self-esteem decline in puberty? |
| ３．学会等名<br>European Association for Research on Adolescence Congress 2018（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>太田正義・加藤弘通 |
| ２．発表標題<br>いじめの深刻化の要因に関する要因 |
| ３．学会等名<br>日本教育心理学会第60回総会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Ho Yuejiang・加藤弘通・太田正義 |
| ２．発表標題<br>不登校生徒の無気力感の変化と関連要因：適応指導教室における短期縦断研究から |
| ３．学会等名<br>日本教育心理学会第60回総会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>濤岡優・加藤弘通・水野君平・YueJiang Hou |
| ２．発表標題<br>家庭の状態が思春期の子どもの自尊感情に与える影響：小学校高学年から中学校までの変化に着目して |
| ３．学会等名<br>日本発達心理学会第60回総会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Kato,H., Ota, M., Mizuno, K., Kauppinen, J. |
| ２．発表標題<br>The Influence of Classroom Disruption on the Severe Level of School Bullying. |
| ３．学会等名<br>18the European Conference on Developmental Psychology（国際学会） |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Hou, Y., Katou, H. & Ota, M. |
| ２．発表標題<br>How optimism in trait resilience affects adolescent self-esteem development : a longitudinal study. |
| ３．学会等名<br>18the European Conference on Developmental Psychology（国際学会） |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>侯ゲツ江・加藤弘通・太田正義 |
| ２．発表標題<br>小学校から中学校への移行期の適応感の変化について |
| ３．学会等名<br>日本青年心理学会 |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>加藤弘通，太田正義，水野君平，濤岡優，木下弘基，侯ゲツ江 |
| ２．発表標題<br>いじめの深刻化要因の検討 |
| ３．学会等名<br>日本教育心理学会 |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Hou, Y., Katou, H. & Ota, M. |
| ２．発表標題<br>What happened to adolescents' school adjustment during educational stages transition? |
| ３．学会等名<br>日本青年心理学会国際ワークショップ |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>稲垣 勉・Hou Yuejiang・太田 正義・加藤 弘通 |
| ２．発表標題<br>小・中学生における顕在的・潜在的自尊感情と抑うつの関連 |
| ３．学会等名<br>日本グループ・ダイナミックス学会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>稲垣 勉・Hou Yuejiang・太田 正義・加藤 弘通 |
| ２．発表標題<br>小・中学生における顕在的・潜在的自尊感情と抑うつの関連(2)――顕在的・潜在的自尊感情の不一致の大きさと方向に着目して― |
| ３．学会等名<br>日本教育心理学会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

〔図書〕　計10件

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>白井利明 | 4．発行年<br>2020年 |
| 2．出版社<br>金子書房 | 5．総ページ数<br>112 |
| 3．書名<br>生涯発達の理論と支援 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>川畑　直人、大島　剛、郷式　徹、加藤　弘通、川田　学 | 4．発行年<br>2020年 |
| 2．出版社<br>ミネルヴァ書房 | 5．総ページ数<br>234 |
| 3．書名<br>心理学概論 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>心理科学研究会（加藤弘通、第６章第１節、第５節） | 4．発行年<br>2020年 |
| 2．出版社<br>有斐閣 | 5．総ページ数<br>294 |
| 3．書名<br>中学・高校教師になるための教育心理学〔第4版〕 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>加藤　弘通、岡田　智 | 4．発行年<br>2019年 |
| 2．出版社<br>ナツメ社 | 5．総ページ数<br>192 |
| 3．書名<br>子どもの発達が気になったらはじめに読む発達心理・発達相談の本 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>白井利明（加藤弘通、第２章） | ４．発行年<br>2020年 |
| ２．出版社<br>金子書房 | ５．総ページ数<br>112 |
| ３．書名<br>生涯発達の理論と支援 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>北海道大学教育学部（加藤弘通、第１章）、宮崎隆志，松本伊智朗，白水浩信 | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>明石書店 | ５．総ページ数<br>200 |
| ３．書名<br>ともに生きるための教育学へのレッスン40 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>髙坂康雅・池田幸恭・三好昭子 | ４．発行年<br>2017年 |
| ２．出版社<br>風間書房 | ５．総ページ数<br>266 |
| ３．書名<br>レクチャー青年心理学 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>伊藤　亜矢子、高橋あつ子、古池若葉、安住ゆう子、小山充道、安江高子、長谷川智広、宮部　緑、弓削洋子、大西彩子、窪田由紀 | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>遠見書房 | ５．総ページ数<br>120 |
| ３．書名<br>学校で使えるアセスメント入門 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>越　良子 | 4．発行年<br>2021年 |
| 2．出版社<br>ナカニシヤ出版 | 5．総ページ数<br>226 |
| 3．書名<br>教師になる人のための学校教育心理学 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>有馬　道久、大久保　智生、岡田　涼、宮前　淳子 | 4．発行年<br>2020年 |
| 2．出版社<br>ナカニシヤ出版 | 5．総ページ数<br>192 |
| 3．書名<br>学校に還す心理学 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

北海道大学大学院教育学研究院　発達心理学研究室・加藤弘通研究室
https://katouhiromichi.jimdofree.com/

6．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 太田　正義<br>(Ota Masayoshi)<br>(10635048) | 常葉大学・教育学部・准教授<br>(33801) | |

６．研究組織（つづき）

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 岡田　智<br>(Okada Satoshi)<br>(10458862) | 北海道大学・教育学研究院・准教授<br>(10101) | |
| 研究分担者 | 大谷　和大<br>(Otani Kazuhiro)<br>(20609680) | 北海道大学・教育学研究院・講師<br>(10101) | |
| 研究分担者 | 大久保　智生<br>(Okubo Tomoo)<br>(30432777) | 香川大学・教育学部・准教授<br>(16201) | |
| 研究分担者 | 稲垣　勉<br>(Inagaki Tsutomu)<br>(30584586) | 関西外国語大学・共通教育機構　・准教授<br>(17701) | |
| 研究分担者 | 弓削　洋子<br>(Yuge Yoko)<br>(80335827) | 愛知教育大学・教育学部・教授<br>(13902) | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|